

# 「バリアフリー映画」202008

正直に言うと、しばらく前まではバリアフリー映画には消極的な気持ちが強かった。推敲に推敲を重ねて、映像も音もこれ以上ないという程ブラッシュアップを重ね完成した映画に、字幕や言葉を加えることに抵抗感があったから…。自分の職人的気質が、積極的になれない理由のひとつだった。それだけ自作の完成度を大切にしたいという気持ちが強かったのだ。それは今も変わらないけど。

ちょっと違う角度から、バリアフリー映画のことを考えられるようになったのは、視覚障がい者のための副音声創りや聴覚障がい者のための字幕製作に、積極的にかかわるようになってからだと思う。気付くのが遅すぎると前々から取り組んでいる人たちには叱られるかもしれない。視覚・聴覚障がいの方々にもきっと叱られる…。

ゴメンナサイ。

時々、映画はラブレターのようなものかもしれない…と思う。撮影させてもらってる被写体へのラブレターであり、観てくれる一人ひとりへのラブレターだ。

「愛だよ、愛…」

それぞれの被写体への眼差しが一樣でないように、観る人一人ひとりへの語りかけも一樣でないのは、自然なこと。その人の心のスクリーンに「愛」が伝わるように映画をいかに届けるか…。目が見えない人にも、耳のきこえない人にもね。

こここのところ自作を上映してくれているミニシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」では、全ての上映作品をバリアフリー版で上映するために、自前のスタジオでバリアフリー版の製作も手がけている。私も『えんとこの歌』『妻の病』のバリアフリー版製作に、ここで取り組んだ。目が見えない当事者、耳のきこえない当事者が、製作に参加して一緒に創っていくやり方なのだが、その当事者の方々が映画を好きで、

映画の「本質」をよく知っていることに驚かされる。

映画の「本質」っていうのは、別に難しいことではなくて、想像力というか、受け止めて考えることの悦びのことだ。

製作途上のやりとりで、スタッフとして参加している当事者に、「ここはもうちょっと説明しないとワカラナイですかね？」と聞くと、大抵「いいえ、説明しない方がいいでしょう…」と言われる。

ワカラナイだろう、という親切心のようなものが、想像力を奪う余計なお世話だ、ということを感じ知らされることの連続だ。もちろん説明が必要なところもある。曖昧な言い回しではなく、的確で必要最小限の言葉が、目が見えない方や耳のきこえない方の想像力の助けになることもマチガイないけど。

ああ、こおいう言葉が必要なんだと気付かされることは、目が見え耳もきこえる私たちに、とても大切なことを教えてくれている気がする。それは、一人ひとりが違うのだ、ということ…。

「他者と出逢う」という、人と人が共に生きるためのベースのようなものを、バリアフリー映画は教えてくれるのだ、と気付かされた。

バリアフリー上映を、視覚障がい・聴覚障がいの方々のためという考え方に留めず、多くの方に体験してもらいたい。「目から鱗」のように色々なことが見えてくるはず。

映画を観る、聴く、という体験を通して、一人ひとり違う人間が共に生きていく、ということの意味を、在りようを、学ばせてくれるように思うから…。

ああ、やっぱり映画はいいなあ…、好きだなあ…。

伊勢 真一